資 料

日本語使役文の学習過程における母語（中国語）の影響について²馮 富 榮¹INFLUENCES OF THE MOTHER TONGUE "CHINESE LANGUAGE"
ON THE LEARNING PROCESSES OF JAPANESE IMPERATIVE VOICE

Fu-Rong FENG

This study was to investigate the influences of mother tongue on a second language acquisition. In survey I, three Chinese groups who had been learning Japanese for different periods and one Japanese group were asked: (i) to choose the appropriate imperative voice markers, and (ii) to rate the naturalness of the Japanese imperative sentences. In survey II, a fourth Chinese group was asked to rate the naturalness of Chinese sentences which were translated from the Japanese sentences in Survey I. The main results were: (i) the error rate in imperative voice markers decreased as the learning years increased while ratings of naturalness remained relatively constant; (ii) in the sentence rating case, when the results of the fourth Chinese group was close to the Japanese group, all five groups were positively correlated. On the contrary, the rating value of the first three Chinese groups was not positively correlated with the fourth Chinese group and nothing related to the Japanese group, but more errors were observed. This study suggested that mother tongue had both promoting and interfering influences.

Key words: second language acquisition, influences of mother tongue, promoting influences, interfering influences.

問題と目的

中間言語に関する研究が始まって以来、第2言語学習の普遍的・発達の側面が強調されるようになった(水野, 1987)。その結果、言語転移についての関心は弱まった。しかし近年、このような傾向に対して、批判の声が上がっている。たとえば、田中・阿部(1989)が“それ(言語転移)を外国語学習理論から外すことは正しくないし、また誤答分析期には、言語転移の特性が十分議論されないまま、その重要性が云々されたところ

も否めない”と指摘している。要するに、母語の影響を再検討しようとする動きが現われてきた。Taylor(1975)は、スペイン語を母語とする英語学習者を対象に、スペイン語のテープを聞かせたあと、それを英語に訳してもらうという課題の実験を行った。その結果、学習が初級レベルから中級レベルになるにつれて、英語文法規則による過剰般化エラーは多くなるのに対し、母語影響による転移エラーは少なくなることが分かった。それについて、彼女は、学習の初級レベルにおいては、第2言語学習の不足のため、母語知識が仮説を立てるときの源泉になるが、学習が進むにつれ、母語知識に依存することなく、学習した第2言語の知識に基づいて仮説をつくることができるようになると説明している。

¹ 名古屋大学教育学部 (Department of Educational psychology, Nagoya University)

² 本研究は財団法人・松下国際財団による研究助成金を受けた。

これと異なった見解が馮(1993)の研究によって出されている。彼女は、構文レベルの日本語受動文の学習における母語の影響を調べたところ、日本語学習歴が10年以上の中国人でさえも、日本語受動文の構文文法よりは中国語受動文の構文文法に従うという結果を得た。ゆえに、第2言語としての日本語学習過程における母語の影響が、構文レベルにおいて大変根強いことが示唆された。しかし、これが中国人の日本語受動文の学習に限っての現象であるのか、それとも中国人の日本語学習における一般的な傾向であるのかについては、検討がなされていない。

そこで、この研究では中国人の日本語使役文の学習過程における母語の影響を中心に、検討することにした。この研究の目的は、馮(1993)の研究によって検証された母語の影響が、中国人の日本語使役文の学習過程にも同様に存在するか否かを検討することにある。具体的には、両言語の使役文における共通点と相違点、それぞれ中国人の日本語使役文の学習に及ぼす影響を及ぼすか、中国人の犯すエラーには容易に減少しないものがあるのか、もしあるとすれば、その原因はどこにあるのかを検討する。即ち、母語の干渉という視点から中国人の日本語使役文の学習を困難にする要因を探ってみる。

中国語と日本語の使役構造の相違点を詳しく検討した楊(1989)によれば、両言語の使役文における相違点は、以下のとおりである。

1) 被使役者Yに対する使役者Xの働きかけが完了した時点で、中国語ではYの動作が行われなくてもよいが、日本語ではYの動作も完了しなければならない。たとえば、“太郎が花子に來させたが、花子は來なかった”は不自然であるが、その直訳の中国語は自然である。

2) 日本語では可能文に使役表現が用いられないが、中国語では用いられる。たとえば、“主人に安心して勉強できさせるために、娘を連れて出ていった”という不自然な日本語を中国語に訳すと、自然な文になる。

3) “有”に関しては、日本語では使役表現で使えないが、中国語では存在の意味では不自然であるが、所有の意味では自然である。たとえば、“讓小李有了一次學習的機會”という自然な中国語を“李さんに勉強の機会を1回有らせる”と日本語に訳すと、不自然になる。

4) YがXの所有物である場合は、日本語なら使役表現が可能であるが、中国語では不可能である。たとえば、“彼は口を尖らせて出ていった”という自然な文

は中国語に直訳されると、不自然になる。

5) Xが人間・動物以外のもので、Yが人間・動物である場合、中国語では使役文を用いるが、日本語では能動文を用いる。たとえば、日本語では“戦争が李さんに肉親を失わせた”よりは、“戦争が李さんの肉親の命を奪った”のほうが自然であるが、中国語は逆である。

6) XがYを移動させ、しかもYが人間・動物であるとき、中国語では使役文を用いるが、日本語では他動詞を用いる場合もある。たとえば、中国語の“別讓小李出去”は自然であるが、それを“李さんに出て行かせないで”と直訳すると不自然な文になってしまう。

7) XがYをZ(身分、職業など)にするという表現は、中国語では使役表現となる。たとえば、日本語では“先生は李君を助手にならせた”より、“先生は李君を助手にした”のほうが適切であるが、中国語は逆である。

8) 中国語では話者のムード(相手への禁止や命令を表す表現)を保ったままの使役表現は可能であるが、日本語では不可能である。たとえば、“我讓小李不要去了”を日本語に直訳すると“李さんに行くなと私がさせた”のように、不自然な文になる。

9) 日本語には自動詞の意味だけを持つ動詞がある。それを他動詞の意味に用いるとき、使役表現を用いる。しかしそれと対応する中国語には自・他両義を持つものがあるので、使役表現は用いない。たとえば、“～を成立させる”より、“～を成立する”のほうが中国語として自然である。

10) ある結果・状態の発生に、Xの直接的な働きかけがない場合、中国語では使役表現が不可能であるが、日本語では可能である。たとえば、日本語の“ご飯を腐らせた”から訳された中国語は、使役文にならない。

一方、両言語の使役構造における共通点は、以下のとおりである。

1) Yの動作がXによって引き起こされることを表す場合、日本語でも中国語でも使役文を用いる。たとえば、“李さんは王さんに行かせた”というのは、日本語でも中国語でも自然である。

2) 両言語の使役文とも生産的に派生できる。つまり、ある固有の動詞や限られた文のみに用いるのではなく、さまざまな動詞(自動詞・他動詞、また“驚く”などのような非意志性動詞など)に用いられる。

3) 結果を表す動詞の場合は、XのYに対する働きかけが完了した時点で、Yの動作も完了しなければならない。たとえば、“彼を驚かせたが、彼は驚かなかっ

た”という文は日本語でも中国語でも不自然である。

4) XもYも人間で、しかも動詞が他動詞である場合は、両言語とも使役文が用いられる。たとえば、“彼は息子に宿題をやらせた”は中国語でも日本語でも自然である。

5) XとYが人間で、動詞が意志の入るような自動詞ならば、両言語とも使役文が使用できる。たとえば、“彼を走らせる”を中国語に訳しても自然である。

6) 両言語共通に使役表現の使用できない自動詞がある。たとえば、“倒れる”などである。

日本語使役文の学習は、受動文の学習と同様に、使役マーカーの学習と構文文法の学習からなっている。前者は被使役者に用いる助詞“に”と“を”のうち、どちらが特定の使役文に適切かを学習することであり、後者はどのような文法構造を持った使役文が自然かを学習することである。前者は、母語と対応しにくいので、母語からの影響を受けにくいと考えられる。ゆえに、前者における学習エラーは学習年数と共に減少していくと考えられる。しかし後者に関しては、母語の構文文法から制限を受けかねないので、母語による影響が大きいと思われる。ゆえに、後者における学習エラーは学習年数が経ってもそれほど減少しないと予想される。

もし、構文文法の学習において母語による影響が大きいならば、2つのことが予想できる。1つは、両言語の共通部分の学習には母語による促進的影響、相違部分の学習には干渉的影響があること、いま1つは共通部分より相違部分においてエラーが多いことである。

以上の予想に基づいて以下の仮説を立てた。

仮説1：使役マーカーの学習エラーは、学習年数と共に少なくなるが、使役構文文法の学習エラーは、学習年数が経っても、容易に減少しない。

仮説2：日本語使役文の自然さを評定するとき、共通項目では中国人の評定平均値と日本人の評定平均値に正相関、相違項目では逆相関、または無相関が得られる。

仮説3：中国人は日本語使役文の自然さを評定するとき、共通項目より相違項目においてエラーを多く出す。

調査 I

1. 目的

調査Iの目的は、中国人が日本語使役文を学習するとき、①どの部分の学習においてより母語の影響を受けやすいか、②母語の影響にはいかなるものがあるか、

③エラーの原因が母語の影響と関連があるか、あるとすればどう関連するか、の3つを明らかにすることにある。

2. 方法

対象

日本人群：日本人197名。そのうち、T看護学校の学生36名(平均年齢19.5才)。N国立大学の学生76名(男性24名、女性50名、性別無記入2名。平均年齢19.6才)。社会人85名(男性28名、女性51名、性別無記入6名。平均年齢43.7才)である。

短期学習者群：中国人の在日留学生、48名(男性15名、女性32名、性別無記入1名。平均年齢26.7才)。日本滞在期間は平均1.3年、日本語学習歴は平均1.7年である。中国で日本語使役文を学習した人は14名、日本で日本語使役文を学習した人は30名。また、どこで最初に日本語の使役文を習ったかに対して、無回答者は4名である。

日本語専攻群：中国のG国立大学の日本語専攻の学生、55名(男性19名、女性36名。平均年齢20.7才)。日本での滞在経験は無く、日本語学習歴は平均4.1年である。

長期学習者群：中国人の在日留学生、41名(男性26名、女性15名。平均年齢32.8才)。日本滞在期間は平均4.8年、日本語学習歴は平均8.6年である。そのうち、中国で4年間日本語を専攻した後、大学の日本語教師をした人は17名、通訳をした人は5名。日本で日本語使役文を学習した人は3名である。

質問紙 I の構成

質問紙Iは、森田(1971)、王(1981)、凌(1981)、徐・張(1983)、曹(1985)、楊(1989)の研究を参考にして作成された。それは、使役マーカー選択課題と日本語自然さ評定課題からなっているが、前者は質問項目内容に適切な助詞を“に”と“を”から選択してもらうもので、21項目からなっている。適当だと思われるならば、複数選択も可とした。後者は日本語の自然さを評定してもらうもので、31項目からなっている。中国語の構文文法と相違する項目は18あり、共通する項目は13ある。相違項目のうち、相違点③と相違点⑧が除外された。なぜならば、相違点③の“ある”は日常会話に頻繁に現われ、日本語の授業でも比較的初期に扱われる文型なので、“あらせる”が不自然であること、また相違点⑧の話者のムードを保ったままの日本語使役文は不自然であることを理解しやすいからである。たとえば、“我讓小李別来”を“李さんに来ると私がさせた”と訳しても、学習者はこれが自然でないとすぐ判断できよう。

項目J1からJ11までは、日本語は自然であるがそ

れと対応する中国語は不自然な項目であり、以下中国語不自然と書く。項目C12からC18まではその逆であり、以下日本語不自然と書く。項目JC19からJC26までは両言語とも自然な文であり、以下両言語自然と書く。27から31までは両言語とも不自然なもので、以下両言語不自然と書く。このうち、使役文でない項目もあるが、それは両言語の使役表現における相違点を出すために設けられたものである。たとえばJ4は相違点⑥、JC22は相違点①、C17とC18は相違点⑨、JC23、JC24とJC25は相違点⑩を表わすものである。項目順序はランダムに並べ、回答の方法は自然、やや不自然、不自然の3段階の評定法であり、それぞれ1点、2点、3点と得点化した。日本語専攻群と日本人群の一部分を対象とした調査は集団で実施し、日本人群の社会人・短期学習者群と長期学習者群を対象にした調査は個別に実施した。回答時間の制限は設けなかった。

3. 結果と考察

使役マーカー選択課題の結果をTABLE 1に、日本語自然さ評定課題の結果をTABLE 2に示した。

TABLE 1 各グループによる使役マーカー“に”と“を”の選択率(%)

質問内容	GJ		G1		G2		G3 ^{a)}	
	に	を	に	を	に	を	に	を
1) 私は彼_歌わせた。	93.40	31.47	79.17	35.42	72.73	32.73	82.93	39.02
2) 彼_彼女を選ばせた。	99.50	1.02	89.58	10.42	96.36	3.64	95.12	4.88
3) 彼_彼女に選ばせた。	9.14	92.39	14.58	85.42	9.09	90.91	17.07	90.23
4) 先生が学生_本を読ませる。	100.00	.00	89.58	10.42	96.36	3.64	90.24	9.76
5) 彼は子供_立たせる。	11.68	98.48	43.75	62.50	21.82	81.82	24.39	80.49
6) 犬_散歩させる。	16.75	96.95	31.25	85.37	27.27	74.55	24.39	82.93
7) 彼は突然姿を現わして相手_驚かせた。	1.02	100.00	41.67	58.33	36.36	67.27	17.07	82.93
8) 自分がかかるまで学生_考えさせる。	94.92	19.29	54.17	50.50	78.18	30.91	75.61	45.16
9) 先生は、学生_考えさせる。	88.32	25.38	66.67	35.42	74.55	34.55	75.61	34.15
10) 親が人形を買って子供_喜ばせる。	2.03	98.98	43.75	58.33	20.00	83.63	24.39	78.05
11) 妹_買物に行かせた。	47.72	78.68	54.17	56.25	30.91	72.73	41.46	78.05
12) 漫才師が滑稽な話をして客_笑わせる。	.00	100.00	45.83	58.33	21.82	80.00	34.15	73.17
13) 彼が彼女_そうさせた。	68.02	71.57	54.17	50.00	72.73	34.55	78.05	34.15
14) 私は彼_自己紹介をさせた。	96.45	7.61	83.33	27.08	92.73	7.27	87.80	19.51
15) 私_作らせて下さい。	100.00	.51	68.75	33.33	90.91	12.73	90.24	9.76
16) 先生は、彼_走らせる。	25.38	96.45	47.92	56.25	23.64	78.18	46.34	65.85
17) 母の死は花子_悲しませた。	.51	99.49	47.92	56.25	36.36	63.64	29.27	75.61
18) 父は兄_仕事を手伝わせた。	98.98	1.02	85.42	18.75	92.73	7.27	97.56	4.88
19) 子供_歩道橋を渡る。	98.48	3.55	77.08	25.00	85.45	18.18	75.61	24.39
20) 彼ら_その提案を反対させた。	99.49	.51	83.33	16.67	96.36	5.45	92.68	9.76
21) 彼_承諾させる。	71.57	58.38	62.50	50.00	60.00	50.91	63.41	56.10
無回答	7		5		9		3	

a) GJ: 日本人群, G1: 短期学習者群, G2: 日本語専攻群, G3: 長期学習者群

TABLE 2 日本語自然さ評定課題における評定平均値(標準偏差)^{a)}

項目内容	GJ	G1	G2	G3 ^{b)}
J1) 彼に聞かせるために大声で言った。	1.18(.45)	1.67(.78)	1.58(.71)	1.49(.75)
J2) 行かせようとしたけれど、彼は行かなかった。	1.02(.16)	2.00(.83)	1.95(.87)	1.68(.82)
J3) 彼は、息子に宿題をさせた。	1.20(.45)	1.79(.80)	1.72(.71)	2.10(.92)
J4) 彼らの中に入れて下さい。	1.02(.12)	1.81(.92)	2.13(.92)	1.68(.88)
J5) 父は息子を医者にさせたいと言った。	1.15(.44)	2.10(.91)	1.86(.89)	1.95(.89)
J6) 彼はお腹をすかせていたので沢山食べた。	1.49(.71)	2.60(.61)	2.80(.49)	2.39(.71)
J7) 日中友好関係を発展させるために頑張ろう。	1.01(.14)	2.13(.84)	1.95(.83)	1.54(.78)
J8) クラス委員会を成立させた。	1.26(.56)	2.33(.81)	2.02(.81)	1.98(.91)
J9) 蒸し暑いのでご飯を腐らせてしまった。	1.41(.64)	2.58(.71)	2.76(.47)	2.54(.75)
J10) 息子を東京大学に合格させた。	1.67(.75)	2.56(.68)	2.49(.69)	2.42(.74)
J11) 子供を交通事故で死なせてしまった。	1.22(.48)	2.65(.67)	2.76(.47)	2.61(.70)
C12) 彼に聞こえるために大声で言った。	2.47(.61)	1.94(.81)	2.22(.83)	2.10(.86)
C13) 行かせたけれど、彼は行かなかった。	2.25(.68)	1.58(.82)	1.56(.74)	1.66(.73)
C14) どんな力が彼をそんなに勉強させたの。	1.53(.70)	1.63(.73)	1.58(.81)	1.66(.83)
C15) 彼らの中に入れて下さい。	2.08(.73)	1.94(.91)	1.73(.91)	1.66(.79)
C16) 父は息子を医者にならせたいと言った。	2.14(.73)	1.94(.89)	1.89(.88)	2.02(.88)
C17) 日中友好関係を発展するために頑張ろう。	2.61(.59)	1.44(.71)	1.40(.66)	1.78(.85)
C18) クラス委員会を成立した。	2.03(.88)	1.23(.56)	1.46(.72)	1.49(.84)
JC19) 息子に留学させるために貯金をした。	1.67(.69)	1.38(.61)	1.49(.74)	1.49(.81)
JC20) 彼は、息子に宿題をやらせた。	1.21(.46)	1.40(.61)	1.46(.77)	1.34(.66)
JC21) 机を外に出さないで下さい。	1.02(.16)	1.21(.54)	1.11(.42)	1.10(.37)
JC22) 彼はお腹がすいていたので沢山食べた。	1.01(.10)	1.15(.46)	1.09(.40)	1.12(.40)
JC23) 蒸し暑いのでご飯が腐ってしまった。	1.02(.17)	1.29(.62)	1.02(.14)	1.05(.22)
JC24) おかげさまで息子は東大に合格した。	1.14(.42)	1.25(.53)	1.06(.30)	1.05(.22)
JC25) 子供は交通事故で死んでしまった。	1.03(.19)	1.19(.45)	1.04(.19)	1.02(.16)
JC26) 驚かせようとしたが、彼は驚かなかった。	1.15(.47)	1.38(.67)	1.27(.62)	1.27(.55)
27) 雪の上を歩いたら足を滑らせて倒れさせた。	2.95(.24)	2.52(.71)	2.71(.57)	2.71(.64)
28) 雪の上を歩いたら足を滑らせて倒れさせた。	2.88(.34)	2.31(.72)	2.06(.87)	2.49(.68)
29) どんな力が彼をそんなに寝させたの。	2.18(.78)	2.31(.75)	2.13(.84)	2.22(.79)
30) 机を外に出て行かせないで下さい。	2.99(.10)	2.65(.67)	2.66(.65)	2.78(.48)
31) 驚かせたが、かれは驚かなかった。	2.03(.79)	2.13(.84)	2.35(.78)	2.24(.86)

a) 3点尺度(1: 自然, 2: やや不自然, 3: 不自然)

b) GJ: 日本人群, G1: 短期学習者群, G2: 日本語専攻群, G3: 長期学習者群

仮説1を検討するために、使役マーカー選択課題と日本語自然さ評定課題におけるエラー率を日本語学習者のグループごとに計算し、FIGURE 1に示した。使役マーカー選択課題では、197名の日本人のうち、10名以下しか選択しなかった使役マーカーを中国人が選択した場合は、エラーとした³⁾。日本語自然さ評定課題では、日本人の評定平均値との差が0.95を超えた場合はエラーとした⁴⁾。

FIGURE 1から分かるように、使役マーカー選択課題においては、長期学習者群のエラー率が僅か8.01%であり、エラー率の最も高い短期学習者群でも13.99%であった。分散分析を用いてグループ間の差を検定した

ところ、有意差が見られた ($F(2,141)=7.89, p<.001$)。Tukey 法による多重比較の結果、短期学習者群と日本語専攻群・長期学習者群との間にそれぞれ有意差が見られた。ゆえに使役マーカーの学習エラーは学習年数と共に減少することが確かめられた。一方、TABLE 1 から明らかなように、短期学習者群より日本語専攻群と長期学習者群の選択回答が日本人のそれに近いことが分かり、この部分の学習は、年数の経過と共に徐々にマスターされることが示唆された。

FIGURE 1 日本語学習者各グループのエラー率

これと対照的に、日本語自然さ評価課題においては、3つのグループともエラー率が高く、短期学習者群は36.42%、日本語専攻群は34.78%、長期学習者群は31.24%であった。分散分析を用いてグループ間の差を検定したところ、有意差が見られた ($F(2,141)=3.19, p<.05$)。これは予想と異なった結果であるので、仮説1は支持されなかった。しかしエラーの減少率を考えると、使役マーカー選択課題のそれとは大きく異なっていると思われる。ここでいうエラーの減少率とは、日本語専攻群のエラー率と長期学習者群のエラー率を短期学習者群のエラー率で割ったものを、それぞれ1から引いた値である。日本語専攻群と長期学習者群のエラーの減少率を計算してみると、使役マーカー選択課題では、それぞれ43.54%と42.74%であるのに対し、日本語自然さ評価課題では、それぞれ4.51%と14.22%であった。ゆえに、エラーの減少率は、2つの課題において実質的に異なっていると言える。したがって、使役マーカーの学習と比べ、日本語使役文の構文学習

のほうが中国人にとってより困難であり、学習年数が経っても容易にマスターできないことが示唆された。

ところで、使役マーカーの学習エラーが学習年数と共に減少した一方で、なぜ構文文法の学習エラーはそれほど減少しなかったのであろうか。それは、前者と比べ後者のほうは母語の構文文法からの干渉を受けやすいからであろう。つまり、学習者は母語の構文文法をもって日本語の自然さを評定したのであろう。そうであるならば、以下の2つのことが起こると予想される。1つは、日本語の自然さを評定するとき、両言語の共通項目では中国人の評定平均値と日本人の評定平均値に正相関、相違項目では逆相関が無相関が得られるということ、いま1つは、学習エラーが共通項目に少なく、相違項目に多いということである。これが仮説2と仮説3である。

仮説2を検討するために、両言語の共通項目における短期学習者群・日本語専攻群・長期学習者群の評定平均値と日本人群の評定平均値の相関係数を求めた。その結果、短期学習者群は $r=.96(p<.001)$ 、日本語専攻群は $r=.94(p<.001)$ 、長期学習者群は $r=.98(p<.001)$ であり、無相関検定の結果、いずれも有意であった。これにより、両言語の共通性がこの部分の学習を促進していることが示唆され、母語による促進的影響が裏付けられた。特に短期学習者群と日本滞在経験のない日本語専攻群においても日本人と高い正相関が得られたことから、中国語と共通部分の日本語学習は、中国人にとって困難でないことが分かった。一方、相違項目における中国人の3つのグループの評定平均値と日本人群の評定平均値の相関係数を求めたところ、短期学習者群は $r=-.41$ 、日本語専攻群は $r=-.31$ 、長期学習者群は $r=-.07$ であり、無相関検定の結果、いずれも有意でなかった。これにより、両言語の相違性が相違項目の学習を干渉していることが示唆され、仮説2が支持された。

ここで興味深いのは長期学習者群と短期学習者群の結果である。長期学習者群は平均約5年間に日本に滞在し、約9年間に日本語を学習しているにもかかわらず、相違項目において日本人との相関が有意でなかった。これは、母語との相違部分の学習は非常に困難であることを示し、第2言語の統語レベルの学習が完全にマスターできない原因の1つが母語の干渉にあることを示唆したものと考えられる。一方、短期学習者群は日本に来てから、日本語使役文の学習を始めた者が多かった。彼らは、日本で日本人教師から正しい日本語使役文を教わっている。しかし、日本人との相関は有

³ 選択した人数が10人以下のものは、日本人の5%以下になるので、読み取り違いによるものと考えられる。

⁴ 差が1を越えると、日本人と反対の傾向となるため。

意ではなかった。それは、学習者はただ受動的に教えられたとおりに第2言語を学習するのではなく、能動的に自分なりの学習方略をもって学習活動に臨んでいることを示唆するものである。さらに3つのグループが共通して日本人と有意な相関を示さなかったことから、この学習方略には3つのグループが共通に持っている母語知識が働いている可能性が伺える。もしこの可能性が成立するならば、日本語自然さ評定課題において、3つのグループの評定平均値の間に正相関が得られると期待できる。実際、3つのグループ間の相関係数を求めたところ、短期学習者群と日本語専攻群は $r=.91$ ($p<.001$)、短期学習者群と長期学習者群は $r=.82$ ($p<.001$)、日本語専攻群と長期学習者群は $r=.87$ ($p<.001$)であり、無相関検定の結果、いずれも有意である。これは注目すべき結果だと言える。なぜならば、中国人の学習者が日本語の自然さを評定するとき、日本語の構文文法ではなく、中国語の構文文法を基準にしてしまう傾向が、学習歴や日本滞在経験にかかわらず、共通に見られることを示唆されたからである。

仮説3を検討するために、両言語の異同性を反映する4つのカテゴリーにおけるグループごとのエラー率を集計し、その結果をTABLE 3に示した。4つのカテゴリーとは、上述したように、両言語自然、両言語不自然、中国語不自然、日本語不自然である。また、共通項目とは両言語自然と両言語不自然の合計であり、相違項目とは中国語不自然と日本語不自然の合計である。

TABLE 3 日本語自然さ評定課題におけるエラー率 (%)

内 容	G 1 (48名)	G 2 (55名)	G 3 ^{a)} (41名)
両言語自然	11.19	7.73	7.32
両言語不自然	19.58	22.55	17.56
共通項目	14.42	13.43	11.26
中国語不自然	55.11	52.89	48.12
日本語不自然	47.92	45.97	41.81
相違項目	52.31	50.20	45.66

a) G 1 : 短期学習者群, G 2 : 日本語専攻群,
G 3 : 長期学習者群

TABLE 3 から分かるように、共通項目においては3つのグループともエラー率が低かったのに対し、相違項目においては3つのグループともエラー率が高かった。特に注目すべきは長期学習者群の結果である。上述したように、このグループは平均9年間日本語を学

習しており、その上大多数が日本語の教師か通訳の経験を持っている。しかしそれにもかかわらず、このグループにも45.7%という高いエラー率が出ている。この結果により、相違項目の学習は中国人の学習者にとってかなり困難であることが分かり、両言語の相違点がすなわち中国人の日本語学習を困難にする要因であることが検証された。ところで、この研究で扱っている8つの相違点の学習は中国人にとって同等に困難であろうか。それを検討するために相違点ごとにエラー率を計算し、TABLE 4に示した。

TABLE 4 日本語自然さ評定課題における各相違点のエラー率 (%)

相違点(項目番号)	G 1 (48名)	G 2 (55名)	G 3 ^{a)} (41名)
相違点①(J 2 C13)	64.58	59.09	47.56
相違点②(J 1 C12)	27.08	19.09	23.17
相違点④(J 6)	66.67	83.64	70.73
相違点⑤(C14)	0.00	0.00	0.00
相違点⑥(J 4 C15)	45.83	60.90	47.56
相違点⑦(J 5 C16)	43.75	38.18	36.59
相違点⑨(J7 J8 C17 C18)	69.27	58.18	49.39
相違点⑩(J9 J10 J11)	70.83	72.12	65.85

a) G 1 : 短期学習者群, G 2 : 日本語専攻群, G 3 : 長期学習者群

相違点⑤において、3つのグループともエラーを出さなかったのは、予想外である。その理由として考えられるのは、日本人の評定平均値が予想より低いからである。たとえば、相違点⑤の“どんな力が彼をあんなに勉強させたの”というのが、日本語不自然として設けられた項目なので、中国人の評定値が日本人の評定平均値より0.95を下回ると、エラーとされる。しかし日本人の評定平均値が1.53と、予想より自然のほうに偏っているの、中国人が最小値1をつけてもエラーにはならないのである。また相違点②と相違点⑦も、比較的エラー率が低かった。それは、相違点②の“聞こえさせる”も、相違点⑦の“ならせる”も不自然だと比較的理解しやすいからであろう。これと対照的に、相違点④と相違点⑩のほうは、エラー率が高かった。それは、“子どもを死なせる”の代わりに“子どもが死んだ”、また“お腹をすかせた”のほかに“お腹がすいた”という中国語と一致する表現もあるので、中国人は中国語と一致する後者だけを吸収し、一致しない前者を見落とすか拒否する傾向があるからであろう。いずれにしても、日本語不自然より中国語不自然の学習がより困難であることがTABLE 3から示唆された。

ところで、なぜ日本語不自然と比べ、中国語不自然

の学習がより困難なのであろうか。それは第2言語の学習に用いる記憶方略として記憶材料の組織化が行われているからだと考えられる。つまり第2言語材料を独立したものとして記憶するのではなく、母語の知識体系に組み込んで記憶するからである。ゆえに第2言語では自然な文であっても、母語にないので最初からそれを拒否する可能性がある。ゆえに学習の機会を失ってしまうことになる。これと対照的に、母語にあるものは第2言語で不自然な文となっても、それが自然だと思いかねないので、自然な文として受け入れる可能性がある。そして学習が進むにつれて、負のフィードバックが得られるので、徐々にそれが不自然だと分かってくると考えられる。

以上の検討により、中国人は日本語使役文の自然さ評定において、日本語より中国語使役文の構文文法に従う可能性が伺える。従って以下の仮説が立てられる。

仮説4：両言語の共通項目では中国人の中国語への評定値と日本人の日本語への評定値が類似し、相違項目では異なる。前者には正相関、後者には逆相関がある。

仮説5：日本語使役文の自然さ評定において、中国人の日本語学習者の評定値は日本人の評定値より、むしろ対応する中国人の中国語への評定値に近い。

仮説4と仮説5を検討するために、調査IIを行った。

調査 II

1. 目的

調査IIの目的は、①質問紙Iの日本語自然さ評定課題の項目は真に両言語の共通性と相違性を反映するものか、②中国人が日本語使役文の自然さを評定するとき、日本語使役文の構文文法に従うか、それとも中国語使役文の構文文法を基準にするかを検討することにある。

2. 方法

対象

中国人群：中国のT国立大学の学生、154名（男性96名、女性57名、性別無記入1名。平均年齢20.3才）である。

質問紙IIの構成

質問紙Iの日本語自然さ評定課題の部分を中国語に訳したものであり、31項目からなっている。項目順序も、回答の方法も、調査Iと同様である。調査は集団で実施し、回答の時間制限は設けなかった。

3. 結果と考察

調査IIの結果をTABLE 5に示した。

TABLE 5 中国人群による中国語自然さの評定平均値（標準偏差）^{a)}

項 目 内 容	M (SD)
1) 為了讓他聽，我大聲說了。	2.23(.76)
2) 要讓他去，可他沒去。	2.40(.73)
3) 他讓兒子作業了。	2.84(.41)
4) 把他們拿進來。	2.22(.95)
5) 父親說想讓兒子當醫生。	2.90(.34)
6) 他使肚子餓了，吃了很多。	2.85(.38)
7) 為了使中日友好關係發展而努力。	1.83(.67)
8) 使班委會成立了。	2.58(.56)
9) 太熱了，讓飯噁了。	2.48(.63)
10) 讓兒子考上了東京大學。	2.34(.61)
11) 讓兒子因交通事故死了。	2.83(.39)
12) 為了讓他聽見，我大聲說了。	1.62(.67)
13) 讓他去了，可他沒去。	1.38(.63)
14) 是什麼力量使他那麼拼命學習的。	1.25(.52)
15) 讓他們進來。	1.03(.20)
16) 父親說想讓兒子當醫生。	1.08(.27)
17) 為了發展中日友好關係而努力	1.30(.56)
18) 成立了班委會。	1.09(.29)
19) 為了讓兒子留學，存了許多錢。	1.55(.66)
20) 他讓兒子作作業了。	1.25(.53)
21) 別把桌子拿出去。	1.08(.30)
22) 他肚子餓了，吃了很多。	1.10(.30)
23) 太熱了，飯噁了。	1.30(.60)
24) 托您的福，兒子考上了東京大學。	1.14(.41)
25) 兒子因交通事故死了。	1.09(.33)
26) 我想讓他大吃一驚，可他沒吃驚。	1.05(.24)
27) 在雪地上走着走着，讓腳一滑讓摔倒了。	2.89(.34)
28) 在雪地上走着走着，腳一滑讓摔倒了。	2.46(.77)
29) 是什麼力量使他那麼拼命睡覺的。	2.62(.57)
30) 別讓桌子出去。	2.65(.62)
31) 我讓他大吃一驚了，可他沒吃驚。	2.68(.50)

a) 3点尺度（1：自然，2：やや不自然，3：不自然）

仮説4を検討するために、各項目における日本人群と中国人群の評定平均値の差得点を計算した。13の共通項目のうち、差得点が0.15以下の項目は8あり、各項目における得点の差の平均値は、0.22である。ゆえに、この13項目は両言語の共通項目であると考えてよいであろう。一方、18の相違項目のうち、差得点が1を超える項目は12あり、0.80を超える項目は4である。項目C14だけは差得点が小さく、0.28であった。上述したようにC14の“どんな力が彼をあんなに勉強させたの”は日本語不自然の項目として設けられた。しかし予想に反して日本人からも自然に近い評定値が得られた。それはおそらく英語学習による影響か、それとも日本語としてもともと自然であるのかのどちらかだと考えられる。ただし、C14を除いた差得点の平均値が1.18であるので、残りの17項目は両言語の相違項目であると考えてよいと思われる。

一方、共通項目と相違項目についてそれぞれ、日本人群と中国人群の評定平均値の相関係数を求めた。その結果、共通項目は $r = .93$ ($p < .001$) であり、相違項目は $r = -.72$ ($p < .001$) である。これにより、両言語の共通項目では中国人の中国語への評定平均値と日本人の日本語への評定平均値が有意に類似し、相違項目では有意に異なっていることが分かり、仮説4は検証された。これは、この研究の中で非常に重要な意味を持つものであると考えられる。というのは、これが立証されない限りは、中国人の学習者は、両言語の相違項目において、日本人と逆相関か無相関を出すという仮説2も、エラーを多く出すという仮説3も、真の意味においては検証できたとは言えないからである。以上の結果より、質問紙Iは両言語の共通性を反映する項目と相違性を反映する項目からなっていることが明らかになった。

仮説5を検討するために、両言語自然・両言語不自然・日本語不自然と中国語不自然の4つのカテゴリにおける5つのグループ間の評定平均値を比較した。5つのグループとは、調査Iの短期学習者群・日本語専攻群・長期学習者群・日本人群と調査IIの中国人群である。もし両言語自然と両言語不自然において5つのグループ間に差が少なく、日本語不自然と中国語不

自然において日本語学習者の3つのグループの評定平均値が日本人群より中国人群のそれに近いならば、仮説5は裏付けられることになる。各カテゴリにおける各グループの評定平均値と標準偏差をTABLE 6に示した。

TABLE 6 から分かるように、仮説5は概ね支持された。ところで、日本語学習者の3つのグループの評定値が、確かに仮説のとおり日本人群の評定値と比べ、中国人群の評定値により近いのであろうか。それを検討するために、分散分析を用いてグループ間の差を検定し、Tukey法による多重比較を行った。その結果をTABLE 7に示した。

TABLE 6 4つのカテゴリにおける各グループの評定平均値(標準偏差)^{a)}

	GJ	G1	G2	G3	G4	GC ^{b)}
両言語自然	1.16(.16)	1.28(.26)	1.19(.19)	1.18(.21)	1.19(.18)	1.19(.20)
日本語不自然	1.98(.30)	1.73(.29)	1.75(.37)	1.77(.42)	1.74(.38)	1.39(.22)
中国語不自然	1.20(.19)	1.93(.30)	1.92(.25)	1.83(.31)	1.92(.25)	2.19(.25)
両言語不自然	2.59(.29)	2.38(.34)	2.38(.39)	2.49(.39)	2.38(.39)	2.66(.30)

a) 3点尺度(1:自然, 2:やや不自然, 3:不自然)

b) GJ:日本人群, G1:短期学習者群, G2:日本語専攻群, G3:長期学習者群

GC:中国人群

TABLE 7 4つのカテゴリにおける各グループ間の評定値の差の検定結果^{a)}

	F	GJG1	GJG2	GJG3	GJGC	G1G2	G1G3	G1GC	G2G3	G2GC	G3GC ^{b)}
両言語自然	1.973										
日本語不自然	233.486***	.	.	.	.			.		.	.
中国語不自然	493.364***	.	.	.	.			.		.	.
両言語不自然	17.347***	.	.					.		.	.

a) df(4,490) b) GJ:日本人群, G1:短期学習者群, G2:日本語専攻群, G3:長期学習者群, GC:中国人群

(.: $p < .05$, ***: $p < .001$)

TABLE 7 から分かるように、両言語自然においては、予想どおり、5つのグループ間に有意差はなかった。しかし、両言語不自然においては短期学習者群と日本語専攻群は、それぞれ日本人群と中国人群と有意差を示した。これはおそらく、学習年数が一番少ない短期学習者群と日本滞在経験のない日本語専攻群はまだ自分の日本語に自信がないため、外国語だから母語と違うだろうという発想からあえて母語と違うように評定値をつける傾向があるからであろう。実際、この傾向が日本語受動文の学習過程における母語の影響についての研究(馮, 1993)にも見られた。しかし、中国人群は日本人群と有意差を示さなかったことから、両言

語不自然も両言語自然と同様に両言語の共通項目よりなることが示唆された。

一方、日本語不自然と中国語不自然のどちらにも、中国人の4つのグループと日本人との間に有意差が見られた。これにより、2つのことが言える。1つは日本語不自然も中国語不自然も、両言語の相違項目からなっていることであり、いま1つは中国人の4つのグループとも日本人と有意に異なった評定値をつけたということである。これにより仮説4は重ねて支持され、日本語自然さの評定において、中国人の日本語学習者は日本語の構文文法に従いにくいという仮説5も裏付けられた。

しかし3つの日本語学習者群は、中国人群とも有意差を示したことは仮説5に反する。この原因については3つのことが考えられる。①TABLE 6から明らかなように、標準偏差が小さかったため、差が有意になりやすいこと、②第2言語の自然さ評定において、母語でないから母語と違うだろうという発想が働いていること、③母語から第2言語への転移があったことである。ただし、9年間日本語を学習している長期学習者群と日本人群の評定値は無相関であり、しかも有意差を示したことから、日本語への転移があったとしても、その転移が大変遅く、大変進行しにくいと考えられる。

いずれにせよ、日本語学習年数の異なった3つのグループ間に有意差がなかったことにより、相違項目の学習は、学習年数経っても容易に進まないこと、またこの3つのグループの用いる学習方略には共通な要因が存在していること、さらにその共通な要因として母語の影響が考えられることが示唆された。そうであるならば、共通項目においては5つのグループ間に有意な正相関があるのに対し、相違項目においては中国人学習者の3つのグループでは、中国人群と有意な正相関が見られるが、日本人群との相関は有意でないことが予想される。この予想を吟味するために、共通項目と相違項目の評定平均値における5つのグループ間の相関係数を求め、その結果をTABLE 8に示した。

TABLE 8 相違項目・共通項目における5つのグループ間の相関

	共 通 項 目				相 違 項 目			
	G 1	G 2	G 3	GC	G 1	G 2	G 3	GC ^{a)}
G J	.964***	.940***	.981***	.932***	-.407	-.305	-.066	-.724***
G 1		.970***	.989***	.970***		.914***	.819***	.663**
G 2			.982***	.964***			.867***	.601**
G 3				.967***				.573*

a) GJ: 日本人群, G1: 短期学習者群, G2: 日本語専攻群, G3: 長期学習者群

GC: 中国人群 (* p<.05, ** : p<.01, *** : p<.001)

TABLE 8 から明らかなように、予想どおりの結果が得られた。これにより、中国人が日本語の自然さを評定するとき、日本語よりは中国語の構文文法を基準にする傾向が再び示唆され、仮説5は重ねて支持された。

全体的考察と今後の課題

この研究では、中国人の日本語使役文の学習過程における母語の影響を検討するために、5つの仮説を立てた。

仮説1の検討により、使役マーカの学習エラーは

学習年数と共に減少していくが、使役構文文法の学習エラーは学習年数経ってもそれほど減少しないことが分かった。そして、エラーの減少しにくい原因の1つが母語の干渉にあることが指摘された。

仮説2と仮説3の検討により、日本語使役文の自然さ評定において、共通項目では中国人の日本語学習者と日本人の評定値が類似し、相違項目では異なっていること、共通項目より相違項目においてエラーが多く生じることが確認された。しかもこれが日本語の学習年数・日本での滞在経験などの如何を問わず、3つのグループに共通に見られた。このことより、第2言語学習に用いる学習方略には母語の知識が働いている可能性が示唆された。

仮説4と仮説5の吟味により、質問紙Iは両言語の共通項目と相違項目からなっていることが実証され、中国人が日本語使役文の自然さを判断するとき、日本語と比べて、より中国語の構文文法に従うことが裏付けられた。

要約すると、この研究により以下のことが分かった。

①使役マーカと比べ、使役文の構文文法の学習のほうが中国人にとってより困難である。

②共通項目の学習においては母語による促進的影響、相違項目においては母語による干渉的影響がある。

③両言語の使役文に関する相違点がすなわち中国人の日本語使役文の学習の問題点である。

④相違項目のうち、日本語不自然の項目よりは中国語不自然の項目のほうが学習の困難度が高い。

⑤中国人の学習者は日本語より中国語使役文の構文文法を基準にして、日本語使役文の自然さを判断する。

⑥学習年数とかかわりなく、相違項目の学習における母語の干渉が一貫して存在する。

以上の結果は、馮(1993)の日本語受動文の学習過程における母語の影響についての研究結果を支持し、第2言語学習に用いる学習方略には母語による知識が働いていることを再び示唆した。特に日本で日本人の教師から正しい日本語使役文を教わっている短期学習者群でも、相違項目において多くのエラーを出したことから、成人の学習者である場合、第2言語の正しいインプットは必ずしも正しいアウトプットを導くとは限らないことが分かった。ここから得られた示唆とは、第2言語の学習を成立させる2つの条件：1) 第2言語に関する情報資料、2) その情報資料を処理する学習者の内的過程のうち、後者の検討がより重要だということである。

学習者は第2言語の情報資料をいかにして処理する

のであろうか。そしてその処理の過程に働く学習方略にはいかなる要因が働くのであろうか。Ellis (1985) により、第2言語の学習過程には、学習者の年齢、性格、認知スタイル、動機づけなど多くの要因が働くことが指摘された。彼によると、学習方略は学習者の内的過程なので、直接観察することが不可能である。ゆえに、それに関する研究の多くは、思弁的、かつ理論的になりがちであるという。しかし、年齢、性格、認知スタイル、学習の動機づけなどを異にしている中国人の日本語学習者の3つのグループは、共通項目において共通に日本人と高い正相関、相違項目において共通に無相関を、また3つのグループ間で共通項目、相違項目を問わず共に高い正相関を示し合ったことから、その学習方略における母語の働きがきわめて大きいことが検証できたと言える。しかも、長期学習者群にも同様な傾向が出たことより、母語による知識が第2言語の学習方略に占めるウェイトが大きいこと、この母語の影響が簡単に消去できないことが示唆された。

ところで、母語による知識はいかにして第2言語の学習方略に働いているのであろうか。それに関して、2つの可能性が考えられる。1つは第2言語材料が母語に一致していないと認知していても、言語表出において、それを母語と一致するように変容させてアウトプットすること、いま1つは母語知識をもって第2言語資料を処理し、記憶する傾向があるので、第2言語資料が母語と異なってもその違いを拒否し、母語と一致するように理解することである。つまり現存の言語知識体系と異なることを認知することによって、内的にアンバランスが生じるので、それを避けるために、母語と異なるものを受け入れようとしないことである。この2つの可能性についての検討が今後の課題となろう。また今後の第3の課題として考えられるのは、この研究により得られた示唆を活かすための教育実践的研究を試みることである。

引用文献

- Ellis, R. 1985 *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford university press.
- 馮 富栄 1993 日本語受動文の学習過程における母語の影響について 教育心理学研究, 40, 388—398.
- 徐 自強・張 海明 1983 格助詞「に」についての考察—授受表現・使役表現を中心に— 日本語教育研究論纂, 1, 38—43.
- 水野晴光 1987 日本語中間言語分析 日本語教育, 62, 152—164.
- 森田良行 1971 受身・使役の言い方 講座 日本語教育, 9, 18—42.
- 王 宏 1981 使役句里的被使役者と格助詞「を」「に」 日本語学習と研究, 4, 37—40.
- 凌 大波 1981 試論使役助動詞 日本語学習と研究, 3, 42—46.
- 曹 大峰 1985 現代日本語「使役」語態的若干特点 日本語学習と研究, 6, 23—27.
- 田中茂範・阿部 一 1989 外国語学習における言語転移の問題(3) —歴史的背景と現状— 英語教育, 11, 78—81.
- Taylor, B.P. 1975 The use of overgeneralization and transfer learning strategies by elementary and intermediate students of esl. *Language Learning*, 25, 73—107.
- 楊 凱栄 1989 日本語と中国語の使役表現に関する対照研究 日本語研究書3 くろしお出版

謝 辞

本稿の作成にあたり、暖かい指導を頂いた名古屋大学の梶田正巳教授・村上隆助教授・先輩・同輩、さらに調査に協力をして下さった天津外国語学院の陳正大教授及び被験者の皆様に心より感謝を致します。

(1994.4.13受稿, 6.28受理)